

日本で第一号の自然休養林に指定され、高知県民の森、高知市民の森として広く親しまれている「工石山」。

直前になると「工石山で鳴くウグイスが正午でお知らせします」というラジオのフレーズを聴いている人も多いことだろう。

高知市街に迫っている300~400mの北山車峠を越えてさらに北に1,000m級の山々が連なっている。

赤良オトンネルの南口が工石山の登山口となるが、昔はこのトンネルの上の山頂まで歩いて歩いた。北と高知の間を往來していた。

いわゆる「北山越え」として呼んでいた。

大妻人気の高い工石山と対峙して三辺山がある。
工石山を歩いてみると形のよい山容がよく見え
存在感を堂々と示しているが、知名度の格
差は大きく訪れる人はかなり少ない静かな
山だ。
黒滝峠のどこかに立枯木に雄雄虎の姿が自然の
力によって刻まれているという。

石山の春、コシヤマクタバミカ
 白い花を咲かす。
 戦国時代、土佐の統一した高岩
 長宗茂部氏の家紋はこの
 カタバミを形どって土佐の幕僚
 カタバミは繁殖力の高い植物か
 子孫繁栄を意味する家紋とし
 ていさ。他の大名家にも使わ

石鉢 - 瓶. 罎.
土壇の積糸。
釜北の山2... 棚田...
あほうい月夜望

アカガシとアノ
昆虫不
学術的にも
貴重な樹生

自由に枝や幹の
のびた野生樹
のような天然
キノコがダクある

上佐岡の宿願。池添良三さんの
回想によると、大正6年頃、小学
校一年の時、親父に連れられて
赤良木越えて高知へ行た。
コースは赤良木峠を越えて、城
を通り高川へ出た。桑屋を
通ってセツ川から榎路へ上り
奈奈寺の栗小学校のところへ
着いていた。
距離約八里(32km)。
足の速い者が5時間、たがひ
人で8時間から10時間かかえ
たという。
ほとんど休まず桑屋の平石の
小屋で弁当を食べたが飯
という。(宿願へ平石約4時間)
荷物も自分でわら草履を
履き横屋にゴケゴの皮を
穿いていた。

十伍町
三居や
行、た。
帰りは
榎山の
じりり
しよた
とまに
相川橋

少休若コエ

ギルネは女に、タマキは男に
化けるといふから、檜山の
タマキは、ミヅリヤとでも
土佐の若い衆であつたに
ちがひない
(土佐の峠日記より)

土佐の峠凡士記に記されている一節によれば、昭和40年の暮れのこと、土佐町土居の「宇佐屋」という旅館の女主人の話として、櫻山越えには高知への往還で、魚の棚(はしや町)で魚を買って、ササで前後に担って、買目(375円)も運ばせたが「神祭や正月には人の二、三人も肩い、高知へ買出しに行かせた」とある。

樫山の恥づかし雨
樫山の山峡にはふ雨
樫様の霧雨がよくなる
という。
これを樫山の恥づかし雨
と呼んでいる。

高知市と土佐町の
分水嶺となっている

工石山は奇蹟・大岩が多数。
 太古の昔より、大岩は
 神が地上に舞い降りる
 目印であるとされている。

昔は櫻山峠を越えていたと
エ石山の方からドーン
ドーンと大きな音がして
おとろしかったという。

北山 北山
 徴兵検査(昭和4年)には足不足
 で2年1.不登山峰と記入検査
 したという。
 工部局の崎まはかきナイ登
 下が近道だ。
 昔コッパ「30分7歩」にういか。
 足るべし不登で「足るべし無足」
 崎まふに「10分7歩」にういか。
 崎まふに「10分7歩」にういか。

水はいたるところに
あり、アキの葉で
あいたり、谷に
くらくらしている
食えんたか
アタナカ

昔は餅や草履売る
茶屋が建っていたとい

山岸のまわりはカヤ原

昔は馬も通っていた道
小石・浮石多い
足元に注意、

参考文庫
工佐の草園工記
明治生まれの工佐
高知の森杯
高知の山と森の物語

工佐町 樫山 - 高知市 工佐山を結ぶ「北山越え」は
嶺北地方から高知への本街道で、赤良木隧道が
抜け、車道が工佐町と工佐山をつなぐことになつた
ため、その往還道としての役命は完全に終り
今は人通りの絶えたただの山道にすぎないが
古くは戦国時代、嶺北地方の豪族、本山氏は
樫山峠を越えて南方に進出し、浦戸まで勢力を
延ばしたが、長宗我部勢に敗れ、朝倉氏を
捨て、ここ樫山峠を越えて嶺北に敗走している。
従つて、この峠越えの道は中世にはすでに
南北を結ぶ連絡道として利用されていた。
「工佐町史」によると「高知へは5時間かかり、
上がり一里、下り一里、上り下り急なため牛や馬し
や、とのことであつた。
峠には店屋もあり、柴餅や草履、草鞋を売つて
いた。又、飯も計り売りで、一合飯、二合飯と
売っていて、行き暮れると泊まることもあつたといふ。
朝二時に出て夜明けには高知の愛宕の町に
店をたき起こしたものが、樫山から来た」と
いふと、店を開けてくれたといふ。
行きには卯、三極などゝサス俵を担い、帰
りは牛の飼料を担ふ。
祭りの近い時は一斗樽を前後に担つたとし
書かれている。(工佐の峠 風土記より)